

『未来へ』の合評会

楠田剛士

本特集は第六二回原爆文学研究会（二〇二〇年二月一九日）で行った合評会に基づく書評と著者によるリプライである。合評会では丸木美術館学芸員である岡村幸宣氏の『未来へ』原爆の図丸木美術館学芸員作業日誌 2011-2016』（新宿書房、二〇二〇・三）を取り上げた。岡村氏は本协会会员であり、本書でも研究会の様子が書かれたり何人かの会員に注が付けられたりしている。会と関わりが深い本書を取り上げたいと考え合評会を企画した。合評会はこれまでの例会で何度か行ってきたが、日誌を取り上げることで小説や研究書とは違った角度から議論できるのではないかとという期待もあった。

書評者は柿木伸之氏と水溜真由美氏である。柿木氏はベンヤミンと中心とする哲学・美学が専門である。丸木美術館で開催した第五二回例会（二〇一七年）で本橋成一氏と対談し、本書の注にも登場している。本書についても理解と関心をもって読み解いていただけるのではないかと考え書評をお願いした。水溜氏は戦後文化運動、戦後思想の研究者である。「原爆の図」や丸木美術館の持つ運動性

について論じていただけのではないかと考え書評をお願いした。詳しくはそれぞれの書評を読んでいただきたい。ここでは当日に寄せられた主な質問や岡村氏のコメントを紹介する。

まず以下のような感想と質問が出された。著者が自分の中にある固定観念にぶつかりながら旅して生きてきた物語として読んだ。二九七頁から二九九頁の、「原爆の図」を見ていた女子高生の死に関する記述を感動しながら読んだ。女子高生は核と関係ないところで悩んで亡くなっているが、核と関係のない人間の苦しみや社会問題に「原爆の図」をどのようにつなげていくのか。

これに対して岡村氏は以下のように応答した。構想の早い段階から本書をこの二〇一六年のエピソードで終わらせようと考えていた。まだ確固とした答えが出ていないが、「原爆の図」が大きな力に対峙する絵画だと結論づけてこの本を閉じてしまうと、自分のなかで何か嘘がまじってしまう。丸木夫妻のその後の活動を見ていくと全ての命のことを考えていたと思うので、全ての命に対してどう作品を開いていくのか、自分自身への問いとしてもこの話を最後に持つ

てきた。この作品が全てを解決するとも思っていないし、何を導き出すかは前に立つ人たちに寄らなければならないと思っっている。それで命が救われた人もいると思うし、果たせない人もいると思う。答えのない問いを抱えながら今後も美術館で働き続けると思う。

そのあとに柿木氏から次のようなコメントがあった。三・一以後の非核芸術で見えてくるのは、芸術家たちが「原爆の図」と「対話」し、その中で芸術の可能性を問うていくプロセスや場があったことである。非核は放射能の問題だけでは決していない。人間が核を作り、人間の命を使い尽くす仕組みが隅々まで浸透してしまった社会のあり方をどう考えていくのか。そのような社会に私たちがいるということを問う場として、今後美術館を生かしていくことができるのではないか。

他に次のような質問が寄せられた。なぜこのタイトルなのか。本書では多くのクリエイターの作品を取り上げているが、なぜ「未来へ号」なのか。また、三二頁に石黒敦彦氏が「原爆の図」の真価は数百年先に理解されると言った話が紹介されている。絵画は小説と異なり、アウラのような一回性の強度が試されるのではないかと考える。岡村氏は「原爆の図」と旅をして、絵を見た人たちの反応を含めていろいろ見てきたと思うが、この絵のアウラをどのように感じているのか。

これに対して岡村氏は以下のようにコメントした。「原爆の図」はずっと先の未来までも残るだけの吸引力を持った作品だと思う。解明できるところは解明し、揃えられる資料は揃え、次の世代に託していくのが自分の役目だと思っっている。丸木美術館はこの二〇年間、明日も分からないようなぎりぎりの状態で続けてきて、この

先もどうなるか分からない。今年(二〇二〇年)二ヶ月間休館したが、多くの方々から寄付をいただいた。自分の思いだけではどうにもならず、みんながこの美術館が続いてほしいと思っただけではないこの美術館は続かない。美術館が無くなっても記録が残るように、美術館の意味を未来に放ちたいと考え、このタイトルにした。遠藤一郎君の車がちょうど未来へ号だったので表紙に使わせてもらった。

他の質問として、子供たちは様々なメディアを通して戦争のイメージを持つていると考えるが、「原爆の図」はどのように伝えられると思うかというものがあつた。これに対して岡村氏は以下のようにコメントした。これまで原爆や戦争についての大きな蓄積があり、人の強い思いで深められている。それを否定することはできないし、正しさの強さは多くの人が関わってきた証でもある。麓のところではみんなが山に登っていく手助けをするのが丸木美術館の学芸員としての役割だと思っ。ただ心地よい、踏み出しやすい一歩ではなくて、思わぬところではつとさせられるものをどう作っていくかということも考えている。

また次のような意見もあつた。「原爆の図」には二つの方向性があると思っ読んだ。一つは各地を旅する「原爆の図」で、各地を旅することで様々な社会問題に開かれていく。もう一つは丸木美術館という場所における「原爆の図」で、この場所で描かれているという、場所に紐付けられた表現でもある。丸木美術館で「原爆の図」を見ることをどう考えるか。

これに対して岡村氏は以下のようにコメントした。この間丸木美術館の建て替えの問題が出ていて、建て直すなら広島に移ったほうがいいのではないかと、もっとアクセスしやすい東京の中心がいいので

はないか、といった議論がある。丸木夫妻が生きた場所で「原爆の図」を見せることをできるだけ目指したい。五〇年、あの場所で美術館が続いてきて、そこに根を下ろしている。「原爆の図」にももちろん魅力があり、丸木夫妻のキャラクターもあるが、来る者拒まずで多くの人を受け入れてきた。この家の門をくぐったものはたとえ警察が来ても突き出さない、というようなことを丸木位里は語っているが、人を受け入れる磁場の意味は何なのか。それは反核という意味だけではなく、すべての人間が等しく生きる思想につながっているのではないか。次に考えていくとしたら、丸木美術館という場所の持つ歴史性をどのように現代的に解釈していくかということだと思っている。この日誌を書いたら「原爆の図」のことで本を描くのは辞めようかと思っていたが、コロナ禍で一旦休館になったこともあり、この美術館が門を開き続けていることの意味を今後掘り下げていきたい。

まだまだ質問・意見を受け付けたかったが、時間の都合で叶わなかった。しかし一つ一つの質問に対して丁寧に応答しようとする岡村氏の姿が印象的だった。参加者と一緒に悩みつつ、わずかでも次の一歩につながる言葉を探しているように見えた。同じように丸木位里と丸木俊も人々の声を真摯に受け止めながら「原爆の図」を制作していったのであろう。対話の積み重ねに「未来へ」と向かう手がかりがあるように思う。残された課題は多いが、合評会の成果が「原爆の図」や丸木美術館の、そして参加者の「未来へ」とつながることを期待したい。参加者の皆様にお礼申し上げます。